

第13部会

として、血の復讐を理解することができるのである。

血の復讐とは、家族間の抗争において繰り広げられる死闘のことである。自分の家族の誰かが他の家族に殺されたばあい、必ず他の家族を殺すべく復讐を果たさなければならない。これに例外規定はない。したがって血の復讐は、聖なる義務なのである。血の復讐を果たさないかぎり、自分の家族は祖先も含めて損なわれた名誉を回復できない。名誉を回復できないということ、これ自体が祖先も含めて家族全員が地獄に堕ちることを意味していた。古代北欧人にとって家族の連帯が醸し出す安らぎや幸福こそが彼らの平和の証であり、他人による家族の殺害は、平和の破壊であった。血の復讐は、聖なる義務であるゆえに、復讐の連鎖を産み出し、無際限に続くことになる。北方ゲルマン民族が血の復讐や殺害を好む野蛮な民族であったというのは誤解である。殺害は、忌み嫌われていたし、『グレートイルのサガ』などからも容易にわかるように、温厚で争いを好まない人物が、古代北欧社会では尊敬されていた。血の復讐は、古代北欧人にとって実人生の苛酷さを示唆する絶好のモチーフであった。血の復讐を果たす者は英雄であり、英雄のみが葛藤や矛盾を超越することができるのであった。また古代北欧人にとって究極のエートスは美であり、英雄は美の体現者でもあった。本発表では、アイスランドサガのうち『ニヤールのサガ』をとおして血の復讐の内実を検討する。

一九世紀神話学とチエンバレン

平藤喜久子

幕末の開国を機に、日本文化は海外に広く紹介されるようになった。古事記も例外ではなく、多くの外国人たちに注目され、翻訳や研究もはじまった。とくに高名な日本学者であったチエンバレンによる翻訳は、後世の日本学にも大きな影響を与えることになった。

チエンバレンが日本神話を翻訳した時代は、マックス・ミュラーやタイラーなどが活躍する神話学の草創期でもあり、実際にチエンバレンは彼ら神話学者とも交流を持っていたことがわかっていく。そのような状況から、チエンバレンの翻訳の背景には、彼ら神話学者たちの影響もあったのではないかと考えられる。

そこで本発表では、マックス・ミュラー、タイラーとの間で交わされた書簡資料などを参考に、チエンバレンの古事記翻訳を一九世紀の神話学の文脈から考察することとした。

チエンバレンの古事記は、ほぼ直訳であり、彼も「素朴な文法」を心がけたと述べているように、解釈をなるべく交えない訳をしている。その解釈や訓読にあたっては本居宣長を高く評価し、それに習う形で翻訳を行っている。また、彼が猥褻だと感じた場面は、ラテン語で記すなど、一九世紀ビクトリア調の道徳意識の反映も読み取ることができる。

その翻訳にミュラーやタイラーの影響がみられるかという
と、イントロダクションではミュラーの概念である“Disease
of Language”という言葉が使われたり、タイラーの Anthro-
pology が引用されたりということが行われているが、研究視
点を利用してはいるわけではなく、翻訳のなかでも自然神話学的
な解釈などはみられない。そのためチェンバレンの古事記翻訳
のみで当時の神話学との影響をみることはできない。

そこで書簡資料からミュラーとの関係をみると、アーネ
スト・サトウがアストンに宛てた手紙によれば、一八八〇年に
イギリスに一時帰国していたチェンバレンは、オックスフォー
ドでミュラーと滞在していると記されている（一八八一年二月
一日付）。この時期は、ちょうど彼が古事記の翻訳にとりか
かっていた時期でもあった。チェンバレンによれば、ミュラー
は古事記の翻訳を試みてあきらめたという体験をもっており、
そうした状況を考え合わせると、チェンバレンが古事記を翻訳
しようとしたことに、ミュラーが影響を与えていたのではない
かと推測できる。

タイラーもチェンバレンと交流を持っていた。オックスフォ
ードにあるピットリバース博物館には、タイラーが集めたさま
ざまな物が収められているが、そのなかにタイラーがチェンバ
レンに依頼して集めた日本の民具やお札などが多数含まれてい
る。

タイラーとチェンバレンとの書簡については、タイラーから
の手紙の内容が一部紹介されていたが、チェンバレンから送ら
れたものは不明であった。昨年ピットリバース博物館でその手

紙が見つかり、調査したところ、そのなかにはチェンバレンが
はじめてタイラーに送った手紙と推定されるものがあつた。そ
の文面には、チェンバレンが日本の専門家としてヨーロッパの
学界に情報を提供しようという意気込みがにじみ出ている。

当時の宗教学、神話学は草創期で、新しい資料を世界中から
集め、盛り上がっていた時期であつた。ミュラーもタイラーと
いった時代を代表する研究者たちも開国したばかりの日本に目
を向け、情報、物を欲していたようである。チェンバレンは、
古事記翻訳の目的を古代日本の習慣や伝統、思考などを明らか
にし、ヨーロッパの研究者に引用されたり参照されたりする英
訳を提供することと述べていた。彼の解釈を交えない翻訳に
は、忠実な情報提供者であらうとした姿があらわれているとい
えよう。

世界神話学と世界宗教史

松村 一 男

本年五月、國學院大學において第三回國際比較神話学会議が
開催された。國際比較神話学会会長のハーバード大学マイケ
ル・ヴィツェル教授と國學院大學の平藤喜久子准教授が中心と
なり、ハーバード大学と國學院大學研究開発推進機構日本文化
研究所からご後援を頂いた。また日本文化研究所の所長である
井上順孝教授と研究所のスタッフの方々から多くの便宜を受
け、成功裏に会議を終えることができた。科学研究費補助金基